

〔報告〕

新型コロナウイルス禍の学内統合看護実習評価： ICTを活用した模擬患者家族対応による学修効果

福原 彩花¹⁾，早坂 笑子¹⁾，大崎 真¹⁾，松田 優二¹⁾，太田 晴美¹⁾

1) 東北文化学園大学医療福祉学部看護学科

要旨

本研究の目的は、A大学での学内統合看護実習におけるICTを活用した模擬患者家族対応を評価し、臨床でどのように役立つのか、今後の課題について明らかにし、ICTを活用した学内実習への示唆を得ることである。調査の結果、回答者全員が実際に家族と関わる体験ができたと回答し、入職後も模擬患者家族対応の経験が役立っていた。ICTの活用により、リアリティのある患者家族対応ができた。さらに患者家族役からフィードバックを得ることで、相手の立場に寄り添うことや家族への配慮に気づくことができた。一方で、チームの一員としての自分の役割を学ぶ機会が減少していることから、模擬患者家族対応のシナリオやフィードバックの内容に関して多領域の教員で協議を行い、チームの一員としての自身の役割や連携について学修効果を高めていく必要性が示唆された。

【キーワード】新型コロナウイルス感染症、統合看護実習、学内実習、ICT活用、
模擬患者家族対応

I. はじめに

新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴い、臨地実習の代替措置として臨地実習の日数・時間の短縮、学内実習あるいは遠隔実習への変更といった影響を受けている。文部科学省(2021)によると2020年10月1日時点で、大学の看護師等養成課程全学年の臨地実習代替措置の実施有無は、代替措置ありが97.2%であった。島村ら(2019)は、実習中に患者とともに過ごすことにより、看護学生は患者を理解したいという思いが高まり、患者の抱く不安に耳を傾けたり、患者の表情や行動から患者の気持ちを察したりするようになる、と臨地実習で患者・家族と関わる重要性を述べている。しかし、新型コロナウイルス感染症の影響で看護学生が実際に患者・家族と関わる機会が減少している現状である。

2020年度のA大学統合看護実習では、全履修

者が学内実習となった。学内で行う際にも統合看護実習の目的・目標、実習時間数を変更せずに、①ICT教育システム(Google Classroom[®]:以下、クラスルーム)を利用した音声課題、②対面学修、③面接、④自己学修で構成した。実習終了時の学生アンケート結果では実習目的を達成できたが、看護技術、対象者とのコミュニケーションの臨床経験不足が明らかになった(太田ら,2021)。文部科学省の調査によると、臨地実習の代替措置を行った大学の看護師等養成課程において2020年10月時点には、学内実習・演習90.7%、オンライン88.6%、紙面による課題学習83.3%、レポート76.5%、オンデマンド50.2%、その他(オンラインカンファレンス、DVD視聴等)16.7%となり、情報通信技術(以下、ICT)を活用した代替措置が増加している(文部科学省,2021)。

2021年度A大学統合看護実習でも履修者の約6割が学内実習となり、太田ら(2021)によ

る前年度の課題をもとに①客観的臨床能力試験(OSCE)に準じたシナリオベースの看護技術実習、②ICTを活用したシナリオベースのオンラインによる模擬患者家族対応を導入した。本田ら(2009)は、模擬患者(以下、SP)の活用によって看護のリアリティを疑似体験し、感情を揺さぶられる体験をすると同時に、SPからのフィードバックは学生にとって患者の気持ちや視点を知る貴重な機会となり、「患者側にたったまなざしの転換」をもたらすと述べている。今回、ICTを活用したオンライン上での模擬患者家族対応が、どのような学修効果を得て、臨床でどのように役立つかを学生のアンケート調査をもとに明らかにしたので、ここに報告する。

II. 研究目的

ICTを活用した模擬患者家族対応を評価し、臨床でどのように役立つのか、今後の課題について明らかにし、今後のICTを活用した学内実習への示唆を得る。

III. 研究方法

1. 研究対象

2021年度にA大学看護学科統合看護実習を学内で行った4年生39名。

2. データ収集期間

- 1) 卒業前：2022年3月14日～3月31日
- 2) 卒業後：2022年6月3日～6月30日

3. データ収集方法

1) アンケートは卒業前(実習から6ヵ月以上経過)と卒業後(実習から1年経過)の2段階調査とし、Google forms[®]を利用した。アンケートは無記名で行い、自由意思による回答とした。

2) 質問事項

オンラインによる模擬患者家族対応について以下の質問を行った。

(1) 卒業前アンケート

- ①オンライン模擬患者家族対応を通して学びになった内容(選択式質問で複数回答可)

- ②オンライン模擬患者家族対応を通して、実際に家族と関わっているような体験ができたか(大いにできた、できた、あまりできなかった、できなかった、の4件法)

- ③オンライン模擬患者家族対応についての自由意見(自由記載)

(2) 卒業後アンケート

- ①オンライン模擬患者家族対応を通して現在も役立っている内容(選択式質問で複数回答可)

- ②オンライン模擬患者家族対応の経験が実際に家族との関りで役立つか(大いに役立つ、役立つ、あまり役立たない、役立たない、の4件法)

- ③オンライン模擬患者家族対応についての自由意見(自由記載)

4. データ分析方法

選択問題は単純集計し、自由記載は類似する内容を研究者間で検討し、内容分析を行った。

5. 倫理的配慮

本研究は、東北文化学園大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した(承認番号：文大倫第21-26号)。研究への協力・参加は自由意思によって行い、協力しないことによる不利益を被ることは一切ないことを口頭説明及び、研究協力依頼説明書に明記した。対象者へは、成績への影響が生じないように成績確定後にアンケートを行った。

アンケートの回答結果へのアクセス権は研究者のみとし、各研究室で取り扱った。データ保管のために使用するUSBはパスワード機能付きUSBメモリーを使用し、かつ保管は鍵付きの戸棚に収納した。研究終了後には5年間保管の後、紙媒体のデータはシュレッダーにて破棄し、USBに保管したデータは消去を行い情報の流失を防止する。万が一の場合においてもデータが流出しないようにファイル毎にパスワードをかけて保存を行った。なお、開示すべきCOI関係はない。

IV. 模擬患者家族対応の概要

模擬患者家族対応は、家族からの情報収集と臨床指導者へのケア・連携の提案を課題とし、①患者の退院に向けて家族の不安を聴き、報告ができる②退院に向けて必要な資源利用調整について臨床指導者に提案ができることを学修目標として実施した。

1. 模擬患者家族役の選定

模擬患者家族役は学生と直接面識がない、一般市民1名および看護師5名に依頼をした。コロナ禍の療養環境を想定できる方として、コロナ禍で家族が入院した経験を持つ一般市民と、模擬患者役の経験がある看護師を選定した。

2. 模擬患者家族役との事前打ち合わせ

模擬患者家族役には事前にシナリオを配布し、オンライン会議で説明を行った。初めての模擬患者役となる一般市民に対しては、複数回のオンライン練習と個別相談対応を行った。看護師は1回30分程度のオンライン練習と要望に応じて個別相談対応を行った。また、全員に対し、ZOOM®の使用方法和通信状況の確認を行った。

3. 学生の事前学修内容

統合看護実習の事前学修課題として、患者設定に関わるCOPDとHOTを提示した。さらに、統合看護実習開始1～2日目に課題文の提示と口頭説明を行った。学生には以下の内容を課題文として提示した。

〈課題文〉

新型コロナウイルス禍で、面会制限があり家族との面会や説明もオンラインで実施しています。看護学生のあなたは慢性閉塞性肺疾患（COPD）で1か月前に救急車で入院した鈴木五郎さん73歳を受け持っています。（現在は、経鼻カニューレ1ℓ/分、会話可能、歩行可能）オンライン面会時に、鈴木さんは在宅酸素療法（HOT）を導入し自己管理ができるようになれば退院できると家族（妻：千代さん）にうれしそうに話していました。鈴木さんは、早く家に帰るためにHOTの指導を

受けることを楽しみにしています。しかし、ご家族（千代さん）は鈴木さんの退院と聞いて不安があるようです。鈴木さんには言いにくそうな雰囲気だったため、面会終了後に改めてオンラインで家族に連絡を取ることにしました。あなたは、ご家族に①鈴木さん退院に関する思いを聞いて、臨床指導者に②鈴木さんとご家族に必要なケアと③必要な（院内・外の）連携について提案してください。

4. 演習構成

1) 実施時間

オンライン面会、臨床指導者への報告と必要なケアの提案、学生へのフィードバックまでを学生1人あたり30分で行った。

2) 演習環境

教室1部屋を使用し、教室には学生1名、臨床指導者役（教員）1名、1～2名の科目担当教員が同席した。

3) 演習の流れ

ZOOM®の画面上には、模擬患者家族1名と学生1名が映るように設定し、模擬患者家族に対して学生がオンライン面談を行った。オンライン面談終了後は模擬患者家族・学生共にZOOM®の画面・音声をOFFにし、学生は臨床指導者（教員）へ報告と必要なケアの提案を行った。最後に模擬患者家族も再度ZOOM®の画面・音声をONにし、模擬患者家族と臨床指導者役および同席した科目担当の教員で学生へフィードバックを行った。フィードバックは、最初に学生自身に「行ってみてどうだったか」率直な感想や振り返りを述べる機会を設けた。その後、模擬患者家族役から対応してもらって嬉しかったことや、もう少し配慮してほしいこと、総合的に良かったことなどを話してもらった。教員からは共通のチェックリストを元にフィードバックを行った。

V. 結果

1. 回収率

1) 卒業前アンケート：回収率87.2%
(対象者39名のうち同意が得られた34名回答)

2) 卒業前アンケート：回収率51.3%
(対象者39名のうち同意が得られた20名回答)

2. 卒業前アンケート

1) オンライン模擬患者家族対応を通しての学び
(選択式質問で複数回答可)

学生が得られた学びに関して図1に示す。「家族の不安、意思、意向を聴く」、「報告、連絡、相談」について回答者全員が学びを得られたと答えている。「チームの一員としての自分の役割」が23名(67.6%)と最も低い回答となった(図1)。

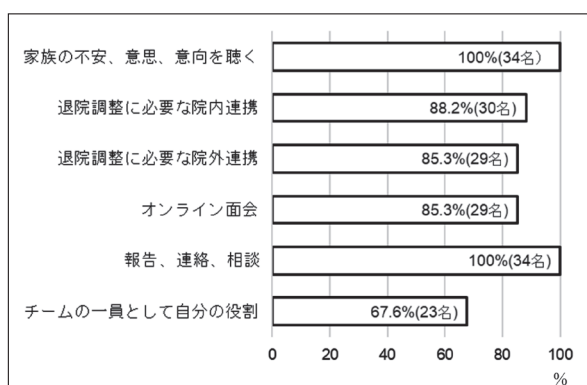


図1 (卒業前) オンライン模擬患者家族対応を通しての学び(複数回答可) n=34

2) オンライン模擬患者家族対応を通して、実際に家族と関わっているような体験ができたか(4件法)

「大いにできた」67.6% (23名)、「できた」32.4% (11名)、「あまりできなかった」と「できなかった」を回答した学生はいなかった(図2)。

3) オンライン模擬患者家族対応に関する自由意見(自由記載)

11件の回答が得られ、家族の意向や不安を傾聴することに関した学びが多く記載されていた。また、コロナ禍による家族との関りが少ない中でオンライン面会を経験でき良かったとの回答もみられた。チーム内での自身の役割に関する学びも得

られていた(表1)。

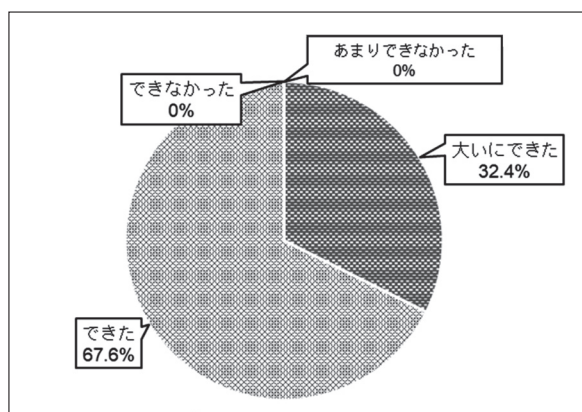


図2 【卒業前】実際に家族と関わっているような体験ができたか n=34

表1 【卒業前】オンライン模擬患者家族対応に関する自由意見(自由記載)

①	家族との関わりをしつつ、主となる家族の気持ちはなにかを考えながら話を展開することが重要だと感じました。また、自分にできることが限られてると思い家族の不安が解消できないような関わりになってしまったため、できることが限られてるからこそチーム内での役割を遂行するための姿勢を学ぶことができました。
②	多くの失敗から自分に足りない点について再確認することができた
③	COPD患者さん家族と話すことができ、家族が抱える不安や悩みを親身に対応する良い経験ができました。
④	家族の方の不安を聴き、その悩みを軽減するためには、知識がないといけないので今後使える資源などもしっかり勉強することが大切だと思います。また、優先順位をつけて報告することやご家族への配慮を忘れないことが大切だと学びました。
⑤	病院実習では家族への看護という場面が少なかった中、オンラインで模擬という形でしたがどのような対応をすればよいか学べる機会となったので良かった。
⑥	リモートで自宅から望んだため1番緊張しました。事前に情報を頂けていたのでしっかり学習して挑めました。
⑦	患者様やその家族に伝える時には、自分の知識を伝えるのではなく、患者様が分からないことに寄り添って伝える必要があると思った。
⑧	コロナ禍であまり家族との関わりがなかったので、この機会に体験できてよかった。オンラインという形も初めてだし、コロナ禍だとオンライン面談も病院によってはあると思うので良い経験になった。
⑨	対面ではなく、オンラインで意向や不安を聴き、それを余すことなく報告することの難しさを学んだ。
⑩	家族の不安をダイレクトに聞くのではなく、さりげない会話の中で情報収集していくということを、模擬的に体験できてよかった。
⑪	自分の役割を理解できてなく、患者家族を不安にさせてしまった。自分の役割を知ることが必要だと学ぶことができた

3. 卒業後アンケート

1) オンライン模擬患者家族対応を通して現在も役立っている内容(選択式質問で複数回答可)

現在も役立っている内容について図3に示す。

「報告、連絡、相談」が16名(80%)と最も高く、次いで「家族の不安、意思、意向を聴く」が14名(70%)、「チームの一員としての自分の役割」11名(55%)となった(図3)。

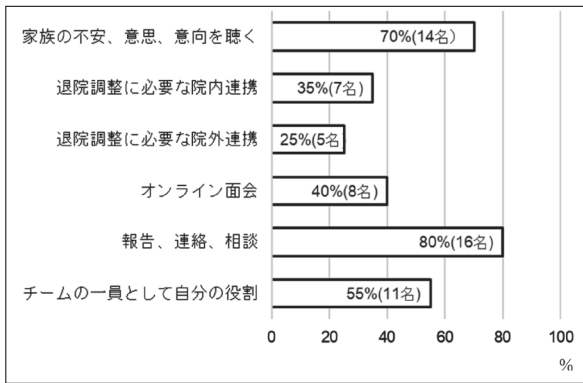


図3 (卒業後) オンライン模擬患者家族対応を通して現在も役立っている内容(複数回答可) n=20

2) オンライン模擬患者家族対応の経験が実際に家族との関りで役立つか(4件法)

「大いに役立つ」35%(7名)、「役立つ」65%(13名)、「あまり役立たない」と「役立たない」を回答した学生はいなかった(図4)。

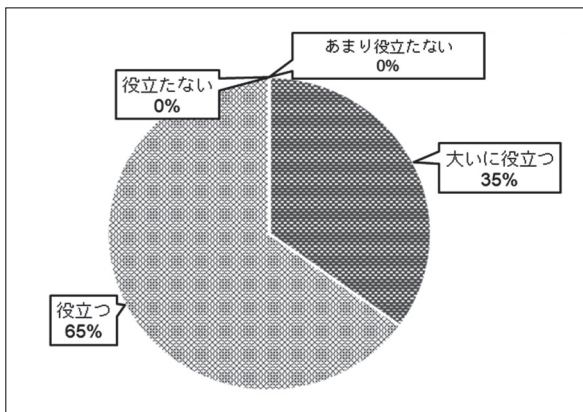


図4 【卒業後】実際に家族との関りで役立つか n=20

3) オンライン模擬患者家族対応に関する自由意見(自由記載)

4件の回答が得られ、「報連相や不安を聞くという基本的なことが活かされている」や「患者の家族と関わる機会がほとんどなかったので模擬できて良かった。」などの回答があった(表2)。

表2 【卒業後】オンライン模擬患者家族対応に関する自由意見(自由記載)

①	報連相や不安を聞くという基本的なことが活かされている。
②	分からない、では終わらせないようにしました。
③	自分のできることとそうでないことを明確にして他スタッフと連携し、患者だけでなく家族の不安も解決することが臨床でも重要なことと感じたため、大いに役立つ演習だったと感じています。
④	患者の家族と関わる機会がほとんどなかったので模擬できて良かった。

VI. 考察

2021年度、A大学で統合看護実習が学内実習になった4年生39名に対し2回に分けアンケートを実施した。1回目は実習から6ヵ月以上経過、卒業前に実施したアンケートである。2回目は実習から1年経過、職務経験としては入職2ヵ月経過時のアンケート結果である。以上のことを踏まえ、学修効果および課題について考察する。

1. 模擬患者家族対応の学修効果

模擬患者家族対応において、回答者全員が実際に家族と関わる体験ができた(図2)し、入職後も模擬患者家族対応の経験が役立っていた(図4)。このことから、ICT活用による模擬患者家族対応は、臨床へ繋がる学修となっていたことが明らかになった。外部の一般市民および看護師を模擬患者家族として選定したことが、普段接する教員とは異なる緊張感をもって実習を行うことができ、よりリアリティのある患者家族対応に繋がったと推察する。さらに、図1「家族の不安、意思、意向を聴く」においても、全員から学びを得られたと回答があった。これは、模擬患者家族とのオンライン面会によって疑似的に対象者の不安や意思を聴く体験が得られたと共に、患者家族役からもその場でフィードバックを得ることで、不安内容や意向を確認するための情報収集のみで終わらず、相手の立場に寄り添うことや家族への配慮に気づくことができた(表1-①③⑦)と考える。本田ら(2009)によると、SPからのフィードバックは学生にとって患者の気持ちや視点を知る貴重な機会となり、「患者側にたったまなざしの

転換」をもたらすとしている。オンラインであってもその学修効果が得られていたと考える。

また、図1、3より「報告、連絡、相談」では全員が学びを得られており、8割が臨床で役立っていると回答していることから、実習での学びを臨床へ活かすことができていると考える。滝島(2017)は、新卒看護師が直面する看護実践上の困難に対する対処法として最も多いのは「先輩に訊く・相談する・助言を求める・アドバイスを求める」であり、基礎看護教育において「分からないことは訊くことができるようにする」必要性があると述べている。模擬患者家族対応を通して、入職2か月の新人看護師にとって必要なスキルを学修できていたと考える。

模擬患者家族対応を通して得られた学びとして回答が最も少なかった項目は、「チームの一員として自分の役割」67.6%であった(図1)。野村ら(2021)は、臨地実習が少なくなったことで患者の権利や倫理観に基づいて行動すること、多職種連携のチーム医療について学びを得る機会が少ないと報告している。本調査の結果においても、学修の機会が少ないことが影響していると考えられる。しかしながら、退院調整に必要な院内外の連携について8割以上の学生が学べたと回答(図1)していることや、入職2か月で半数がチームの一員としての自分の役割を感じることができている(図3)。本田ら(2009)は、SP参加型教育の課題として学びの質がチューター(教員)の力量に左右されると述べている。今回、教員がフィードバックをチェック項目化することで、連携やチームの一員としての役割について教員の専門性や経験年数に左右されずに学びの質を担保することができたためと考えられる。模擬患者家族対応のシナリオやフィードバックの内容に関して、多領域の教員で協議を行い、チームの一員としての自身の役割や連携について学修効果を高めていく必要がある。

2. ICT 活用の学修効果

オンライン面会は85.3%が学びを得られた(図

1)と回答し、表1-⑧「コロナ禍だとオンライン面談も病院によってはあると思うので良い経験になった」という自由意見もみられた。有田ら(2021)によると、オンライン面会では傾聴や共感など患者心理を理解しようとする基本的なコミュニケーションは同じであるが、相手の表情や雰囲気を読み取りにくいいため話の間が掴みにくく、会話がかぶり気味になることや曖昧な語尾や沈黙から相手の意図を汲み取ることが困難なため、よりはっきりとした言葉で伝えることも必要であると述べている。入職2か月の中で40%がオンライン面会の学びが役に立つと回答している(図3)ことから、学生のうちからオンライン面会を疑似的にでも経験することで、配慮することや気を付けることが事前に分かり、臨床において役立つ学修内容と考える。

また、コミュニケーションは看護の基本であり、島村ら(2019)は、基本的コミュニケーションスキルの修得において、患者と直接関わるができる実習の役割は大きいと述べている。コロナ禍の面会制限によって学生は特に家族と直接関わる機会が減少し、臨床経験が不足していると考えられる。太田ら(2021)は、学内実習において対象者とのコミュニケーションの臨床経験不足は否めないと指摘している。ICTを活用することで、外部の一般市民および看護師を模擬患者家族として学生と繋げることが可能となった。学生からは「患者家族と関わる機会がほとんどなかったので模擬でできて良かった(表2-④)」と意見・感想があり、コミュニケーションの経験を得ることができていたと考える。

さらに、外部に模擬患者家族役を依頼することで教員が模擬患者家族役を担う必要がなくなり、フィードバックに教員を複数配置することができ、学修効果を高めたと考える。しかし一方で、模擬患者家族の選出・調整、ICT環境の整備や打ち合わせ等、事前の入念な準備が重要である。さらに、演習当日の通信障害やSPの欠員等、不測の事態へ対応できる教員の配置も必要となってく

るため、ICTを効果的に活用していく上でICT環境の整備、人員の確保は今後も課題となる。

Ⅶ. 結論

ICT活用による模擬患者家族対応は、臨床へ繋がる学修効果を得られていることが明らかになった。ICTの活用により外部の一般市民および看護師に模擬患者家族を演じてもらうことによって、よりリアリティのある患者家族対応ができた。さらに患者家族役からもその場でフィードバックを得ることで、不安内容や意向を確認するための情報収集のみで終わらず、相手の立場に寄り添うことや家族への配慮に気づくことができた。

一方で、臨地実習が少なくなったことでチームの一員としての自分の役割を学ぶ機会も減少していることから、模擬患者家族対応のシナリオやフィードバックの内容に関して、多領域の教員で協議を行い、チームの一員としての自身の役割や連携について学修効果を高めていく必要性が示唆された。

Ⅷ. 研究の限界

本研究は、一教育機関の限られた人数による調査結果であるため学修効果を一般化するには十分なデータ数とは言えない。また、卒業後アンケートは入職2か月時点のため、臨床で未経験の業務も多いことが考えられ、模擬患者家族対応による学修効果が調査回答に十分に反映されているとは言い難い。今後は、対象者数の拡大と、臨床での経験とともに学修の効果を継続的に評価していく必要がある。

文献

- 有田悦子, 竹平理恵子 (2021). オンライン医療面接「患者心理とコミュニケーション」の試み—教育効果と留意点—, 薬学教育, 5, 43-47
- 本年多美枝, 上村朋子 (2009). 看護基礎教育における模擬患者参加型教育方法の実態に関する文献的考察—教育の特徴および効果、課題に着目して—, 日本赤十字九州国際看護大学 Intramural Research Report, 7, 67-77
- 文部科学省 (2020). 看護学実習ガイドラインおよび新型コロナウイルス感染症の発生に伴う学校養成所の運営に関する取扱い, 2020年10月文部科学省高等教育局医学教育課(令和4年11月9日検索)
https://www.janpu.or.jp/mext_mhlw_info/file/doc03.pdf
- 文部科学省 (2021). 新型コロナウイルス感染症下における看護系大学の臨地実習の在り方に関する有識者会議 報告書—看護系大学における臨地実習の教育の質の維持・向上について2021年6月8日(令和4年11月9日検索)
https://www.nurse.or.jp/nursing/practice/covid_19/faculty/pdf/report_uniforcovid19.pdf
- 野村美紀, 奥井良子, 長嶋祐子 (2021). コロナ禍における成人看護学慢性期実習の学生の学び—臨地実習と学内実習の両方を体験した学生の学びの認識—, 駒沢女子大学研究紀要(人間健康学部・看護学部編), 4, 59-70
- 太田晴美, 大崎真, 早坂笑子 (2021). 新型コロナウイルス禍の学内統合看護実習評価—学生アンケート結果から—, 東北文化学園大学看護学科紀要, 10 (1), 27-42
- 島村美香, 藤本学, 幸史子, 他 (2019). 統合実習が看護学生の基本的コミュニケーション・スキルに及ぼす影響—ENDCOREsを用いたスキル・タイプの検討—, 九州看護福祉大学紀要, 20, 153-63
- 滝島紀子 (2017). 新卒看護師が直面する看護実践上の困難点とその対処法に関する研究, 川崎市立看護短期大学紀要, 22 (1), 57-69